



## 「子どもから学ぶ」という姿勢

完璧な人間など存在しませんから、大人も子どもとのやりとりの中で失敗をすることがあります。特に子育てでは試行錯誤の繰り返しですから、いろいろな失敗があるでしょう。自分が失敗をしたとき、反抗期の子どもは、ここぞとばかりに大人を追い込んできたりするものです。冷静になれば自分が悪かったと思える親でも、いざ自分を責め立てる子どもに直面すると、なかなか素直になれずに意地をはってしまい、後で後悔する、ということも少なくありません。

### ○ 間違いを認められない親

いろいろな人間関係において、「先生役」と「生徒役」があります。学校での本当の先生と生徒もそうですし、たいてい立場が上の人は「先生役」をやっています。親子であれば親が「先生役」、子どもが「生徒役」です。「先生役」は、「いつも正しくあることが期待されている役割」です。ところが、完璧な人間などいませんから、いつも正しくあることなど無理です。それなのに、「いつも正しくあること」を自らに課し続けていると、いろいろな歪みが出てきます。たとえば、自分の間違いを認めない、ということもあるでしょう。



相手のせいにすることもあります。親子の例で言えば「たしかに約束を守れなかったかもしれないけれど、それはもともとあなたが無理な約束をさせるから」ということになるでしょう。このようなパターンに陥りやすいのはなぜかと言うと、「先生」としての自分の立場が脅かされるように感じるからです。でも、実は「先生役」を自分の意思で降りることもできる、ということ子どもに示すのも親の重要な仕事なのです。

子どもに対して素直になるのがなぜ難しいかと言うと、「先生役」のまま失敗を認めようとするからです。

### ○ 時には大人も「生徒役」になる。

子どもから学ぶという姿勢に転じて、「約束を守れなかった」というような状況では、「たしかにそうだね。ごめんね。約束は守れるようにしたいから、どういうふうに工夫できるか、一緒に考えてくれない？」と言えばよいのです。

子どもの言い方がきつすぎるのであれば、「そういう言い方だと感情的になってしまって冷静に聞けないの。もっとよく理解したいから、もうちょっと優しい言い方をしてくれない？」と言えばよいのです。これは、子どもに対して「もっとわかりやすい先生になって」と頼んでいるのと同じことです。親が「先生役」で居続けると、子どもがどんな言い方をしても理解するのが親の務めということになりますが、親が「生徒役」になってしまえば、わかりやすい言い方をすることが子どもの務めということになるのです。そもそも、「もっとよく理解したいから」と親から言われて嬉しくない子どもはいません。

「言い方を変えてくれ」といくら言っても子どもが変わってくれないというケースもあるでしょう。子どもが変わろうとしないのは、親がまだ「先生役」を続けているときだと考えられます。「先生」からの「要求」に聞こえてしまうと、反抗期の子どもは反抗するだけです。「おまえの言い方はわかりにくい。違う言い方をしろ」という言い方は「先生」の言い方です。「生徒」の言い方は、「そういう言い方だとわからないので、違う説明をしてくれない？」ということになります。

親が「生徒」になってしまうと秩序がなくなるのではないかと、と思われるかもしれませんが、実際は逆です。子どもに「先生役」を頼むということは、子どもに自覚と責任感を持たせることになります。何でも親のせいにするのではなく、人間関係には自分が負っている責任もある、ということを教える効果があります。

「子どもから学ぶ」という姿勢は、子どもが失敗をしたときにも有効です。頭ごなしに叱っても、子どもの記憶には単に「叱られた」ということしか残りません。同じ間違いを繰り返さないためには、子どもはその間違いから十分に学ぶ必要があります。

そういうときには、まず、「どういつもりでそれをやったのか」という子ども側の意図をよく聞いてみましょう。「この状況をよく理解したいから、どういつもりでそれをやったのか教えてくれる？」と聞けばよいでしょう。子どもの説明の中で、「なるほど」と思うところが見つければ「なるほど」と言ってあげるとよいでしょう。

子どもに自分で考え、答えさせることがポイントです。そうすれば、子どもは「押しつけられたもの」という拒否反応を起こさずに、結論を自らの責任で受け入れていくようになります。